

今どきの歴史

「谷川健一コレクション」刊行

庶民の目、沖縄からの目

民俗学者、谷川健一(1921~2013年)の全集未収録の作品を集めた『谷川健一コレクション』(全6巻)が全集の版元、富山房インターナショナルから刊行中で、このほど第2巻が出た。新聞への寄稿などコンパクトな文章中心という手軽さの一方、一文ごとに思考や主張が凝縮され、読み応えがある。

それには明確な理由がある。かつてインタビューした時、谷川氏は柳田国男が自身の著作に付けた序文を非常に高く評価していた。執筆の動機、テーマ、分析の骨子、結論を簡潔、適切に表現しているというのである。柳田を師と仰いだ谷川氏が短文の意義と力を強く意識し、情熱を注いだことは間違いないのだ。

谷川健一「小さきものへ」、2巻『わ

本シリーズの1巻『小



会長を務めた「宮古島の神と森を考える会」のシンポジウムで司会をする谷川健一氏(右)＝沖縄県宮古島の狩俣集落で2008年11月23日

が沖縄のタイトルは「谷川民俗学」の本質にかかわる。その根幹にあるのは、「日本とは、日本人とは何か」を知りたいという欲求だった。現にあるわれわれの成り立ち、つまりは歴史を知りたいということだ。

その歴史理解の方法が、なぜ民俗学なのか。「思うにこの世には自分の思想や感情を文字で表現しようとは毛頭考えない人たちが少なくとも半分はいる」(『小さきものへ』所収「民衆の顔を描くもの」―聞書きの

系譜)、1960年)文字による記録や資料は、歴史の総体からすればわずかなものだ。世界の本当の姿を知ろうとするなら、権力者たちの政治史といった大きな歴史をみるだけでは不足で、文字に残らない記憶や感情を掘り起こさなければならぬ。普通の庶民、「小さきもの」の声に耳をそばたてる民俗学の方法が不可欠なのだ。「僕は庶民が好きなんです」と、谷川氏が笑っていたのを思い出す。

もちろん、狭義の歴史学(文献史学)や考古学の最前線の成果を踏まえての話だ。そこに非文字文化の集積が加わるのだから、歴史学他の分野からは見えない全体像が見えてくるのだ。

古代信仰の姿を思わせる、などといわれてきた。仏教の影響が希薄で、「強烈な古代性を現在まで温存させるのに役立った」と谷川氏も書く。

ただ、古い習俗とは過去を次々と脱ぎ捨てた裸の残存文化だなどと考へがちな一部の研究とは全く違う。沖縄の古代性は、現代の人々をも最深处から統一する生活の中心軸だと考へる。だからこそ、現在の自分を省みれば古代にたどりつくことができる。これは柳田国男の方法と共通する。沖縄の魅力とは、生きた古代が現在と同居していることにあるのだ。

そうした探究の姿勢と成果が簡潔にわかる一冊として、「琉球弧の世界観」(『わが沖縄』所収、79年)が挙げられる。「沖縄の海岸に立つとき、私はいつも深い感慨におそわれる。それを一口にいうとなれば、現世と他界とを一望に見渡すときの感動である」

こう始まる一文。沖縄の島々はサンゴ礁に囲まれている。サンゴ礁の

内側は明るい生活圏、いわば現世で、その外側は、船が到達しない時代にはめったに行かない非日常の世界、いわば他界だ。

この生と死の混然たる古代の精神世界が、いま眼前に広がる沖縄の。それは本土の過去の姿かもしれない。その光景を谷川氏はこのほか好み、足しげく沖縄に通い、その将来を思い、「日本人とは」の疑問に自ら回答を出していった。

続く4巻のタイトルは『日本の原像―民俗と古代』『地名の世界』など。10月に完結の予定で、全体では寄稿や序文、あとがき、編集後記、書評、本の解説、講演など数百年が収録される。どこからでも読め、文学作品とさえ呼べる香気に浸りながら、「歴史とは」「日本人とは」という大テーマへの深い示唆を得られるものと思ふ。

【伊藤和史、写真も】
毎月1回掲載

私に音楽は、東吉、りす、る、世、大音、は、この、が仕事、さま、だ、聞、を聴、Dが大、聴、な、も思、山だ、葉が、た、いう、のト